

「ヤイロの娘、死から起き上がる」

2015年07月04日

ルカによる福音書8章40節～42節、49節～56節。イエスが帰って来られると、群衆は喜んで迎えた。人々は皆、イエスを待っていたからである。そこへ、ヤイロという人が来た。この人は会堂長であった。彼はイエスの足もとにひれ伏して、自分の家に来てくださるようにと願った。十二歳ぐらいの一人娘がいたが、死にかけていたのである。イエスがそこに行かれる途中、群衆が周りに押し寄せて来た。(中略)

イエスがまだ話しておられるときに、会堂長の家から人が来て言った。「お嬢さんは亡くなりました。この上、先生を煩わすことはありません。」イエスは、これを聞いて会堂長に言われた。「恐れることはない。ただ信じなさい。そうすれば、娘は救われる。」イエスはその家に着くと、ペトロ、ヨハネ、ヤコブ、それに娘の父母のほかには、だれも一緒に入ることをお許しにならなかった。人々は皆、娘のために泣き悲しんでいた。そこで、イエスは言われた。「泣くな。死んだのではない。眠っているのだ。」人々は、娘が死んだことを知っていたので、イエスをあざ笑った。イエスは娘の手を取り、「娘よ、起きなさい」と呼びかけられた。すると娘は、その霊が戻って、すぐに起き上がった。イエスは、娘に食べ物を与えるように指図をされた。娘の両親は非常に驚いた。イエスは、この出来事をだれにも話さないようとお命じになった。

主イエスがゲラサ地方からカファルナウムに帰って来られると、待っていた群衆は大喜びで迎えた。その中に、ヤイロという会堂長がいた。彼は額を地面にこすりつけるようにしてひれ伏し、12歳ぐらいの一人娘が死にかかっているのを、自分の家に来てほしいと懇願した。この光景は奇妙なものであった。会堂長は、会堂で行われる全ての宗教行事を取り仕切る人で、律法学者たちと深く関わって職責を果たす、町の名士であった。律法学者たちが主イエスを憎んでいることは周知のことであった。ヤイロは一人娘の病気に動転し、日頃から親しくしていた律法学者たちでなく、敵対していた主イエスに平身低頭の姿で懇願したのである。見ていた群衆は「これは、面白い」と興味津々であった。主イエスは会堂長の求めに応じて、ヤイロの家に向かった。群衆は押し合いへし合いしながら、二人を追った。そこへ、12年間、出血の止まらない女性が割り込み、時間を取られた。

女性と話していると、会堂長の家から「お嬢さんは亡くなりました。この上、先生を煩わすことはありません」との娘の死の報告が届いた。ヤイロは絶望のどん底に突き落とされた。時間を取らせた女性を恨めしく思っただろう。絶望するヤイロに対し、主イエスは「恐れることはない。ただ信じなさい。そうすれば、娘は救われる」と言われる。希望の言葉である。ヤイロは絶望と希望の狭間を揺れ動きながら、我が家に向かった。主イエスはペトロ、ヨハネ、ヤコブ、そして両親だけを娘の所に集めた。町の名士の会堂長の娘が死んだので、大げさな悲しみの泣き声が響いていた。主イエスは「泣くな。死んだのではない。眠っているのだ」と言われると、娘の死を知る人々はあざ笑った。主イエスは娘の手を取り「娘よ、起きなさい」と呼びかけると、娘はすぐに起き上がった。そして、食べ物が与えられた。ヤイロは絶望が希望に変えられ、無上の喜びに包まれた。

人は皆、絶望と希望という対極の言葉、メッセージを聞きながら生きている。信仰はどんな絶望の中にあっても、主イエスに信頼し、希望に向かって生きることであり、神がそのように導いてくださることを信じることである。